

〈時評〉

ブラジル日本移民史料館

——史料保存の現状——

小笠原 公 衛

はじめに

2008年の今年は、ブラジルの日本移民100周年にあたる。第1回移民船の笠戸丸以来、戦前戦後を通じて約25万人の日本人がブラジルに移民として渡っているが、「ブラジル日本移民史料館」（以下「史料館」）もまた1978年の移民70周年を記念して開館後、30周年という節目の年を迎える。そこで、1世紀におよぶ日本移民の史料が現在どのように保存されているか、史料館全体の活動をあらまし説明しながらここに紹介したい。筆者は、国際協力機構（JICA）の「日系社会シニアボランティア」として、2006年7月から2年間の予定で当史料館の学芸員として赴任、本稿も任期中に執筆したものである。（なお、1981年から1988年まで「サンパウロ人文科学研究所」に研究員として勤務、また1986年から1988までは史料館副館長として兼務した経験を持つ。）

現状を把握してもらうために、象徴的な事例（といっても通常の業務であるが）を挙げる。たとえば、「水野龍」（移民の創始者）について調べたいという来訪者があるとする。対応の職員（日系人）は簡単な日本語の会話は可能だが、込み入った話や読み書きができないため、来訪者を図書室の書架に導き入れ、「どうぞ、ここから探してください」と言い残してその場を去る。来訪者にとっては目的の書籍を自分で探す負担が課せられるが、反面、他の史料を渉猟する自由を与えられたことにもなり、すこぶる

開放的なシステムであるという印象を持つにちがいない。一見これは利用者優先の開放的なシステムのように思えるが、そうではない。日本語のわかる職員がいないための館側の苦肉の策である。

これによってどんなことが予測されるだろうか。史料は書籍のほか、旅券・契約書などのドキュメント、日記、手紙、新聞・雑誌、写真など多岐にわたる。自由に閲覧してもらうのはいいとして、史料が所定の場所に戻らなかったり、破損、盗難などの恐れなしとしない。戦前の新聞などは、劣化が著しく、いくら慎重に扱ってもポロポロ紙片がこぼれてしまうほどになっているものが少なくない。このほか、オリジナルに直接触れてほしくない貴重な史料が多々あって、できれば部外者は立ち入り禁止にしたいところである。筆者が在任していた20年前、部外者は中に入れなかった。その後、出入り自由となり今日に及んでいるが、このような方式をとっているのもうひとつ、データベース化・デジタル化がなされていないことにも起因している。

I 史料館の概要

1 沿革

「ブラジル日本移民史料館」は、移民70年祭の記念事業の一つとして1978年6月18日に落成した。サンパウロ市の中心地リベルダーデ区にある東洋街と呼ばれるガルヴァン・ブエーノ通りとサン・ジョアキン通りが交差する一角に建つ、「ブラジル日本文化福祉協会」（代表的な日系文化団体、通称「文協」）のビル（通称「文協ビル」）の中にある。9階建て（ブラジルは1階を地上階とするので日本でいえば10階建て）の文協ビル内には文協事務所、大講堂、文協図書館をはじめ、サンパウロ人文科学研究所、ブラジル日本都道府県人会連合会、ブラジル生け花協会、ブラジル裏千家協会、憩の園、エスペランサ婦人会、サンパウロ日伯援護協会など日系の諸団体が入居している。なかでも史料館の施設は最大面積を占め、7～9階が展示室（1344m²）、3階に事務所、図書室、物品史料室、作業室など5

室 (329m²) を有する。

史料館創立の理念は、1976年に「ブラジル日本移民史料館建設委員会」が発表した建設趣意書にみることができる。

日本移民も第1回笠戸丸より既に67年を経過し、日系人活動の軸がようやく1世より2、3世に移ろうとする昨今、われわれはこれまでの日本移民の実績の数々を、単に文章のみならず、その実生活の軌跡を語る史料、言いかえれば当時の生活器具、作業器具、写真、印刷物、書簡、肖像画等の展示を介して記録保存することは、われわれ1世の責務であると痛感します。すなわちブラジル日本移民史料館を建設して、日本移民の足跡を後世の日系人のためにも、またブラジル社会のためにも末永く保存いたしたく存ずる次第であります (後略)。

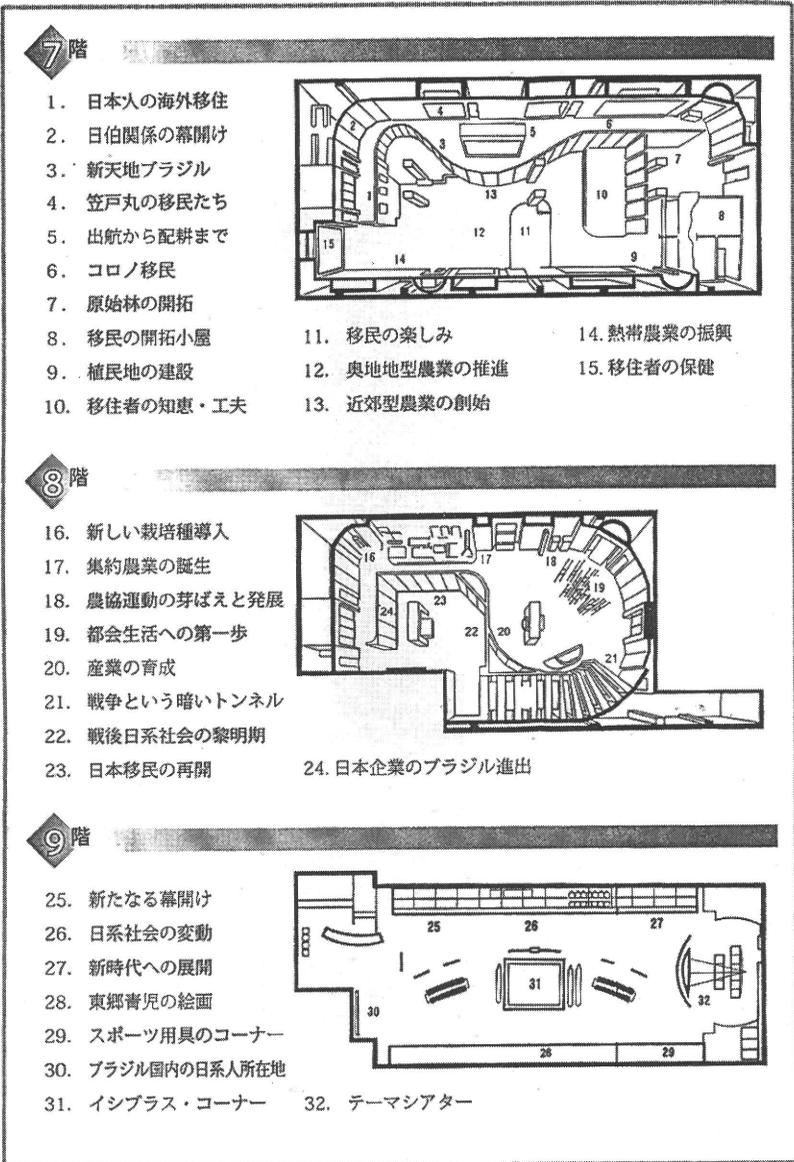
史料館の運営は当初、独立団体として発足させる意見もあったが、文協ビル内にあること、文協のような大きな組織がなければ運営が困難などの理由から、文協理事会のなかの専門委員会のひとつ「史料館運営委員会」が行うことになり、それが今日まで踏襲されている。運営委員会は10人ほどの委員からなり (任期2年、改選可)、運営委員長が取り仕切る。史料館には館長と常勤職員が6名のほか、パート2名 (史料補修など)、これに数名の地元ボランティアと学芸員の筆者が加わる陣容である。

2 展示室 (7～9階)

一般の来館者が見学する展示室 (設計監理は東京の「丹青社」) は図1のようになっている。3つのフロアに約1800点の文書・写真・物品史料が展示されている。

1978年の開館以来、7階、8階の常設展示と屋上の日本庭園という基本形が、2000年に屋上庭園を廃止し、9階が増設された。また既存の7、8階も次の3ヶ所にわたって変更がみられた。

図1 ブラジル日本移民史料館の展示室



(出典) 文協50周年編集委員会 (2007)。

- (1) 7階「電気ウナギ」のコーナーが、「移住者の保健」に改造された（7階図面の15）。生きた電気ウナギを水槽で飼って人気を集めていたが、飼育がむずかしく何匹も死んで、そのたびにアマゾンから補充して担当職員を煩わせていた。
- (2) 8階特別展示室の廃止（8階図面の右端の欠落部分）。9階の増床に伴い、特別展示室にあった東郷青児の絵画（7.3m×2.1m、7.8m×2.1m）を9階に移転、同室は物品史料の収蔵庫となる。特別展の企画と開催は史料館の根幹をなす重要な活動である。それまで専任の学芸員のいない中で、年に数回の特別展を行ってきたが、同室の廃止で特別展の開催は数年にわたって遠ざかることになった。
- (3) 8階のマルチスクリーン（8階図面の左下の欠落部分）。当時の先端技術三面マルチスクリーンを駆使し、70年におよぶ日伯交流の歩みを映像でみせていたが、先端技術の宿命として後続の最新技術に先をこされてしまい、故障後は代替部品を調達できずに上映不能となった。また、時間の経過とともに、交流史のその後の更新が必要だったにもかかわらず制作費のめどが立たず、マルチスクリーンは閉鎖の憂き目にあった。現在は、これも物品の収蔵庫と化している。

このほか、開館時にはなかった7階（11右側部分）の一角に、皇国殖民会社のブラジル側代表として笠戸丸で渡伯、のちに上塚植民地を創設した上塚周平のコーナーが設置されており、近々、それに隣接して葡和辞典・和葡辞典の編纂者・大武和三郎の常設コーナーを設ける予定である。さらに、史料館の活性化を図るうえで欠かせないものとして、8階特別展示室の復活を準備中である。

3 3階の施設

図2 ブラジル日本移民史料館 3階の配置図

図書室	事務室	物品史料室①	作業室	物品史料室②
-----	-----	--------	-----	--------

3階にある史料館施設の略図である。各室に収蔵されている史料と業務内容は次の通り。

- ◇図書室…書籍、新聞・雑誌、ドキュメント類、日記、写真、移民名簿などの文書史料を収納。
- ◇事務室…事務と史料の閲覧、訪問者の応対、図書の販売などを行なう。
- ◇物品史料室①…農具、民具、生活用具など小型の物品を中心に収納。
- ◇作業室…文書ならびに物品史料の破損・劣化部分の修繕作業を行なう。
- ◇物品史料室②…絵画、図面、着物、フィルムなど取り扱いと保存に注意を要する物品を収納。

現在の配置は、筆者がいた20年前と大きく変わった。当時、史料は文書も物品もすべて現在の図書室に納められ、「収蔵庫」と称していた。現在の事務室はかつては「研究・閲覧室」で、事務室は現在の物品史料室①であった。作業室というものはなく、現在の作業室は「館長室」、物品史料室②は「会議室」として使っていた。8年前、現在の形に変更したのは、収蔵庫が手ぜまになったことによる。それだけ文書史料、物品史料ともに増えたわけである。

大型物品の取り扱いは、ビル施設内の博物館には泣き所である。保存スペースが限られており、搬入・搬出や移動に困難を伴う。史料館の場合、過去において文協が所蔵管理するサンパウロ市郊外の旧コチア小学校の教室に所蔵されていた。広々とした木造校舎で、スペースに不足はなかった。ただ、車で30分ほどの距離にあって頻繁に行くわけにはいかず、そのぶん目が届きにくい。史料収蔵にかかわる必要設備も一切ないまま、荷物然として倉庫に保管していたにすぎなかった。

これには苦い経験がある。22年前のことである。寄贈者からの依頼があって史料をチェックする必要があり、保管倉庫に行って目を疑った。屋根瓦の破損により雨漏りが生じて当該史料を直撃、見るも無残な姿に変わっていた。寄贈者に事情を打ち明けて平身低頭したが、史料館の管理不

行き届き以外のなものでもなかった。願わくば、全史料は手元に置きたいところであるが、諸事情によりそうもいかない。大型物品史料は1990年、そこから近い同小学校の寄宿舎に引っ越し、2、3年後にそこから近い文協の倉庫に再び移り、さらに昨年、今度はサン・ロッケというサンパウロ市から約30キロの郊外にある「国士館大学センター」（1996年国士館大学から文協が無償譲渡されたスポーツセンター施設）内の保管倉庫へと再三場所を変えている。こちらは万全といかないまでも、事前に全体を収蔵庫として床を上げ、壁を塗り替えるなどの改装を施し、それ以前の3施設とは格段に環境は改善されている。

II 活動内容

1 史料の受け入れ

(1)所蔵点数

史料館は一体どのくらいの史料を保有しているのか。残念ながらはっきりした数字はつかめていない。唯一の記録は、寄贈されたときに記入する手書きの「登録台帳」（ないしは「受入台帳」）である（これから転記した史料カードがあるが、現在使用されていない）。台帳は文書史料用と物品史料用の2種類あり、文書用には史料館創立以前の1975年から記載、2008年2月現在9冊目に入っており、通し番号は「38896」を数える。といって、文書史料の総数が3万8896点ということにはならない。数え方がまちまちで、たとえば写真1枚1枚に番号をつけているかと思えば、「写真を一つの項目」として複数枚あっても一つの番号にまとめていたり、なかには「寄贈者一人を一つの番号」にしていたりと一定していない。記載方法を記入者に徹底していなかったことがわかる。この不徹底さは写真にかぎらず他の文書史料にも、また物品史料の受け入れにもみられるところから、通し番号よりは実際の数がかなり上回っていると推測される。

物品史料の登録台帳をみると、最初は受付日が記載されておらず、7番目にいたって初めて1975年2月13日の日付があらわれる（登録作業の前に

すでに物品史料が集まっていたことになる)。こちらの台帳は現在4冊目に入っていて、5960番を数える。物品台帳も文書台帳と同様の理由で実数が記載数を上回ると予想されるほか、同じ人物から同じ種類の物品を複数点寄贈された場合、1点として同一番号にしているケースが多く、これもまた通し番号をそのまま鵜呑みにはできない。ならばはたして誤差はどのくらいかと問われれば、全史料をデータベース化でもしないかぎり正確な数字は得られないだろうから、「?」と答えるしかない。この点からもデータベース化は急務である。

(2)記載項目

受付日、品目、特徴、寄贈者名、住所といったって簡略である。この中で「特徴」がもっとも重要であることはいうまでもない。これによって史料の価値が左右されるといっても過言ではない。少しでも多く、より正確な情報の記載が求められる。これには寄贈者あるいは所蔵者がその史料についてどれだけの情報を持っているか、また持ち込んだときの館側の対応者（「受け付け」と「聞き取り」を一人で行なう場合がほとんど）がどれだけその情報を引き出せるかにかかっている。その種の知識を持つ者か相応の訓練を受けた者があたるのが最良であるが、これまでの記述を読んでもかぎりその条件を満たしているとは言いがたい。

一例を挙げると、植民地の名前である。たとえば「ボア・ビスタ植民地」といわれても、同名の植民地はサンパウロ州のほかゴイアス州、 Rondônia州、パラナ州に19ヶ所もあって、どの植民地か特定はむずかしい。また「日の出植民地」という名前もサンパウロ州だけでなくパラナ州、ミナス・ジェライス州に18ヶ所ほどあり、最寄りの町か近辺の駅の名前をきいておかないとあとで戸惑うことになる。したがって写真の寄贈を受ける場合なども、キャプションの内容と付帯する情報をいかに正確に、多く引き出せるか館側の対応者の責任は重い。

(3)記載言語

基本は日本語であるが、物品史料については、8年ほど前から担当が日

図3 文書史料の分類法 (概略)

A	図書 (ブラジル発行)		
B	図書 (他国の発行)		
C	名簿	A	移民名簿 (冊子)
		B	移民名簿 (ペラ)
D	日記・手帳	A	日記
		B	手帳
E	メモ・報告書等	A	メモ帳
		B	報告書
F	帳簿・家計簿	A	帳簿
		B	家計簿
G	旅券等	A	旅券
		B	労働手帳
H	契約書・定款等	A	契約書
		B	定款
J	証書・賞状等	A	証書
		B	賞状
K	書簡	A	自筆書簡
L	写真帳	A	写真帳 (印刷)
		B	写真帳 (現物)
M	写真・フィルム等	A	写真
		B	フィルム (ネガ)
N	地図・図面等	A	地図
		B	図面
P	領事館関係書類		
R	その他	A	チラシ
		B	ポスター
		C	絵葉書
S	切抜史料		
T	雑誌・会報 (ブラジル発行)		
V	雑誌・会報 (他国の発行)	A	移民関係
		B	その他
W	新聞	A	ブラジル発行
		B	他国の発行

系人にかわって記載はすべてポルトガル語になった。文書台帳のほうは、一世のボランティアにより週二回、日本語による記載が継続されている。住所はポルトガル語で書かれるのは当然として、氏名については一様ではない。寄贈者が日本語が分からなかったり書けない場合はそのままポルトガル語で記載するしかなく、仮にSHOJIであったとして、それが「庄司」か「東海林」なのかの区別は不可能に近い。

(4)分類記号

当初、文書史料は明確に分類されていなかったようである。書籍、文書、

日記、写真などごく大雑把な分け方しかしていなかったと思われる。その証拠に、受入台帳には分類項目はなく、記載もされていない。受入台帳に分類記号が記載されはじめたのは1986年からである。これには理由がある。1984年6月、南米（主にブラジル）の移民史料収集のため日本の国立国会図書館が送った派遣職員が作成したものがある。史料館内に事務所をかまえ、2年間の駐在中、史料館の所蔵史料に沿った独自の分類表（図3）を作成、以後はこれを基本にすべての文書史料の分類を行なうようになった（物品史料の分類はされていない）。

2 史料の保管

(1) 図書室（図2参照）

内部（約108m²）は床、壁、天井が総板張りになっているほか、4基の換気扇を備え、防湿性と通風性に配慮している。エアコンの設備はないが、サンパウロ市は標高約800m、年間平均気温19.5℃、一日に四季があるといわれるほど変化に富んだ気候とはいえ、耐え難いほどの暑さ・寒さはない。2基の大型の可動式書架（縦217cm×横104cm×長さ821cm）が室内の半分を占め、残りのスペースと壁際に沿って配置されたスチール製の棚に史料が収納されている（図4）。

A（スチール製地図用5段引出し）…地図、イラスト等

B（スチール製6段～7段棚）…書籍

可動式大型書架①…書籍、移民名簿、日記など

可動式大型書架②…各種ドキュメント、雑誌、小冊子など

C（スチール製5段～6段棚）…新聞

D（スチール製4段棚）…新聞

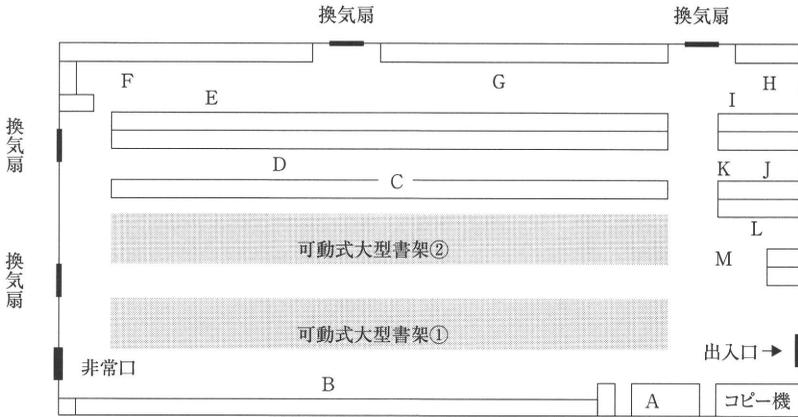
E（スチール製6段棚）…書籍、雑誌

F（スチール製6段棚）…書籍ほか

G（スチール製5段棚）…書類ほか

H（スチール製5段棚）…書類ほか

図4 図書室の配置図



I (スチール製6段棚)…写真

J (スチール製6段棚)…写真、写真帳

K (スチール製6段棚)…写真帳

L (スチール製6段棚)…その他

M (スチール製8段引出し) 2台…マイクロフィルムほか

文書類や小冊子は市販のファイルのほか、史料館特注サイズのボックスに収め、写真の収納はテーマ別に市販のファイルを使用。新聞は以前は半年分を業者にだして製本していたが、現在はそのままの状態、新聞が収まる特注サイズのファイルボックスに保管している。

(2)物品史料室① (図2参照)

図書室の半分ほどの面積に、スチール製の棚、木製の棚(扉付き)数台を設置、農具、大工道具、カメラ、蓄音機、時計、甲冑、人形、羽釜、セイロウ、食器、玩具、置物などのほかインディオの武具などが並ぶ(図5)。

(3)物品史料室② (図2参照)

スチール製のロッカー、木製の引き出しなどに着物、絵画、フィルム、パネル、刀剣、植民地の区割地図などを収納。300着以上の着物は和紙で

図5 物品史料室①

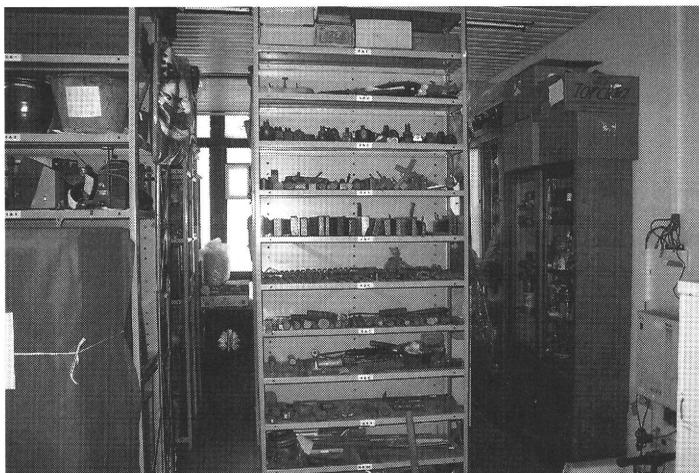


図6 物品史料室②



包装、100点ほどの絵画も丁寧に包装して保管するも、日本刀に関しては、手入れの必要なものが数振りあるが、専門的な知識がなくそのままの状態
で置かれている。以前は、寄贈者が生前、定期的に来訪して油をさすなど
の手入れを行なってくれていたが、没後はそれもなくなった（図6）。

(4) 国士舘大学センターの物品収蔵庫

大型のものや、同一種類で数の多い物品を収納。机、イス、オルガン、牛車、養鶏の育雛器、日本から持参した行李、20台以上はある蓄音機、餅つき用の杵と臼、手製の仏壇や神棚などさまざま。しかしながらこれまで4度も場所を変えている。度重なる移動で、付着史料カードの解読不能や紛失、それに史料そのものの損傷は免れない。引越しのつど性急な移動を強いられ、時間的余裕がないまま十分な準備と受け入れ態勢がなされてこなかった。また不備な施設に一時的に保管されている間に、史料は埃をかぶり、虫食いの被害にもあう。清掃、シロアリ駆除もなされない。移送にしても、この種の物品の扱いに慣れていない業者と、急遽かり出されたボランティアたちが作業にあたってきた。移動は不可欠だったとはいえ、結果として史料の汚損は避けることができなかった。史料の保存と管理を考えると引越しは禁物で、しないに越したことはないのである。

3 史料の利用と公開

所蔵史料の中で利用度の高い史料といえば、新聞のバックナンバーと移民名簿が双璧である。とりわけ新聞は情報の宝庫である。筆者など目当ての記事を探すつもりが、ついつい他の記事や商業広告、死亡広告、告知欄などに目がいて時間の経つのを忘れてしまう。現に、思わぬ記事に出会うことがしばしばである。所蔵する新聞では『伯刺西爾時報』（1917年～）がもっとも古いが、ところどころ破れが目立ち、状態は最悪に近い。『聖州新報』（1923年～）、『日伯新聞』（1924年～）、ほかに『南米新報』（1930年～）、『日本新聞』（1932年～）などがあり、利用の頻度は高いものの、いずれもできればオリジナルに触れるのは回避したいところである。

実は、これらにはマイクロフィルムが存在する。先述した国会図書館が職員の駐在中に撮影班を派遣し、新聞と移民名簿を中心にマイクロフィルムに納めて、そのコピーを史料館に寄贈した（現存390本）。併せてプロジェクター2台を寄贈し、当初、利用者はそれを使って新聞、移民名簿を

閲覧していたが、いつのまにか使用されなくなった。おそらく、フィルムをプロジェクターにセットしたりはずしたりする手間や画面のみにくさ、コピーができない不便さ、替え電球の入手のむずかしなどのマイナス面から敬遠されるようになったのだろう。直接、原史料にあたって写真に撮ったほうがはるかに便利である。これも一日も早くデジタル化を達成し、パソコン上で検索できれば問題解決となるが、経済的理由から実現をみていない。

移民名簿には、移民の渡航年月日、船名、氏名、出身地、年齢、家族構成、配耕地先が記載されている。閲覧希望は当の本人が確認のためにやってくる場合や、家族・親族のルーツ探しなどがある。後者の場合、日本語が分からない人が少なくない。そうしたことから、百周年記念協会の記念事業のひとつとして、日本語ができない人でも利用できるように、移民名簿のローマ字化の作業が現在進行中である（日本語、ポルトガル語の2言語で入力）。これならパソコン上で日本語、ポルトガル語のいずれでも記載項目（キーワード）を打ち込み、瞬時に検索が可能となる。完成後、このシステムは史料館に設置される予定である。

より積極的な史料の公開方法として、特別企画展がある。特定のテーマで文書、写真、物品史料を駆使し検証することによって、史料館の活動を広範にカバーできるからである。テーマに沿ってまずは所蔵品にあたり（史料整理）、足りないものを外に求め（史料収集）、展示形式を考えながら（研究活動）、開催（広報活動）までこぎつけるという一連の流れは、史料館の主要な業務を包括する。また開催の効果として、さらなる史料収集につながることも期待できる。

昨年6月、特別展「笠戸丸以前の渡伯者たち——大武和三郎、藤崎商会、隈部三郎を中心として」を開催した。企画の段階では、隈部三郎を除いてめぼしい史料はほとんどなかった。周辺史料だけで苦戦の展示を覚悟していたが、日本の大武和三郎の親族と連絡がとれたことによって100点以上の新史料を発掘することができた。藤崎商会については、仙台にある創立

180年の親会社に問い合わせしてみたものの、先の戦争で空襲にあい、関係史料はすべて焼失してしまっていた。ところが特別展終了後しばらくして、ブラジルの関係者の家族から、同商会在当時使用していたという貴重な伝票が1枚持ち込まれた。特別展開催の効果が、大武の新史料発見とともに、みごとにあらわれることになったのである。

まとめ

史料館はこれまで切り詰めた予算の中で活動がかなり制限されてきた。母体である文協とともに「諸悪の根源」は、この運用資金の欠乏によるものといってよいだろう。史料館をはじめとする文化事業にたいする意識の低さが、背景にあることも事実である。こうしたこれまでの流れの中で、移民100周年、史料館創立30周年の記念の本年は、幸いなことに日陰だった部分によりやく光が射してきそうである。史料館に関連した事業がいくつか計画され、すでに実行されているものもある。

- (1) 「ブラジル日本移民百周年記念写真展」…JICA（国際協力機構）と百周年記念協会の共催。企画・構成を「JICA 横浜・海外移住資料館」と史料館が行ない、日本各地を巡回するもので（2月～10月）、すでにはじまっている。
- (2) 同様の企画をブラジル各地の史料館を中心に開催する。（4月～10月）
- (3) 写真集『目で見るブラジル日本移民の百年』の出版…百周年記念協会の百年史編纂委員会と史料館と共同で編集・執筆。2008年4月、風響社より刊行。
- (4) 「史料館所蔵史料のデータベース化とデジタル化プロジェクト」…約30万ドルの予算で4年間にわたって行なわれる大型プロジェクト（4月スタート予定）。非能率的だった史料の扱いと、史料の劣化などがこれによって解消されよう。

以上、これまで微風もしくはその兆候さえなかった「文化の風」が、

100周年と30周年を機に勢いをつけて吹き始めてきた観がある。ことに(4)のプロジェクトは、史料館の永年の悲願ともいうべき作業である。この事業は実行委員会が史料館内に設けられ、ブラジル側だけでなく日本側のカウンターパート（協力団体・協力者）とともに推進、ゆくゆくはインターネットによる公開（アーカイブ）も視野に入れた大掛かりなものとなる。このプロジェクトの実施過程の中で、ひとりでも多くのブラジル日系社会の研究者が育つことが期待されている。

〔補記〕

地方の日本移民史料館・日系博物館

20年前、移民史料館はブラジル全国にサンパウロを入れて、バストス、パラナ州ローランジャの3館であった（当時、筆者が確認したもの）。現在は16館ほどに増えている。ほどの意味は、確認していないものや、計画中のものがいくつかあり、今後も増えそうな気配のことをいう。既設のものを表にしてみた（表1）。

- ◇この他、パラナ州マリंगाのフランシスコ・ザビエル学園内に小さな記念館があり、同学園創立に貢献のあった木村神父ほか数人が顕彰されている。
- ◇おなじくカトリック関係で、サンパウロ州アルバレス・マッシャードに、中村長八神父の業績を顕彰した記念館がある。
- ◇計画中のものとしてはパラナ州アサイ、南マット・グロッソ州カンポ・グランデ、サンパウロ市近郊グアルーリョスの高齢者養護施設「憩の園」（2008年7月予定）、サンパウロ市の沖縄県人会（2008年8月、ジアデーマの沖縄文化センター内に建設予定）、サンパウロ市に近いモジ・ダス・クルーゼス（2008年6月予定）などがある。
- ◇博物館施設というのは得てしてオープンまではこぎつけるが、完成後は関心が薄れ、乏しい予算で維持管理が思うようにいかないところが多い。こうした共通の悩みを話し合うために、サンパウロの史料館が

表1 ブラジル全国の日本移民関係史(資)料館(順不同)

	名称	所在地	創立年	運営母体	特徴	収蔵点数
1	ブラジル日本移民史料館	サンパウロ (SP)	1978年	ブラジル日本文化福祉協会	質・量ともに世界最大級の日系移民史料を所蔵。	5万点以上。
2	山中三郎記念バストス地域史料館	バストス (SP)	1975年	バストス市	山中氏が単独で各地を巡って収集、サンパウロ市に先駆けてオープン。写真史料が豊富。	写真を中心に約1万2千点。
3	パラナ州日本移民史料館	ローランジャ (PR)	1978年	「パラナ文化運動連盟」と「パラナ日伯文化連合会」	「ローランジャ農産物資料館」が前身。展示物品史料に直接触れることができる。	2000点以上。別棟として開拓神社の他、開拓小屋を再現。
4	リベイラ・レジストロ日本移民記念館	レジストロ (SP)	2002年	レジストロ市が文協に運営を委託。	海外興業(株)の精米所・倉庫跡を利用。	約300点。日系画家の作品数点あり。
5	東山農場珈琲資料館 Museu do Café	カンピーナス (SP)	2005年	東山農場	農場(800ha)内のコーヒー園のほか19世紀の奴隷小屋、コロノ住居などが見学できる。	約120点。別に図書室があり、資料目録作成中。
6	リンス慈善文化協会史料館	リンス (SP)	2002年	リンス慈善文化体育協会	文書、写真、物品がバランスよく収集されている。	5000点以上。
7	アラサツバ日伯文化協会移民史料室	アラサツバ (SP)	1995年	アラサツバ日伯文化協会	保管を兼ねた展示形態。	写真100点。物品100点。
8	ペレイラ・パレット移住歴史館	ペレイラ・パレット (SP)	2005年	ペレイラ・パレット移住歴史館支援協議会	旧チエテ移住地の史料。	1000点以上。
9	北原・輪湖記念館	ミランドーポリス (SP)	1990年	コムニダージュ弓場(弓場農場)	アリアンサ移住地、弓場農場関係の史料。	2500点以上。
10	ウライ歴史博物館	ウライ (PR)	2002年	実業家・森清の個人コレクション	コーヒーの保管倉庫を利用。化石を主体にインディオ関係、コーヒー関係の農具、馬具、小型トラクターなど。	1万点以上。文書、写真は僅少。
11	インテグラダ・コーヒー博物館	ロンドリーナ (PR)	1995年	インテグラダ農業協同組合	旧コチア産業組合時代からの史料。大型のコーヒー精選機10数台あり、一部操業中。	300点以上。コーヒー関係の物品が主。
12	マリンガ文化体育協会史料室	マリンガ (PR)	1981年	マリンガ文化体育協会	会館の正面左に小さくまとめた展示室。	物品、写真が約200点。
13	トメアスー日本人移民史料館	トメアスー (PA)	1999年	トメアスー文化農業振興協会	アマゾン地域最古の日系植民地の歴史がわかる。胡椒栽培で有名。	1000点以上。
14	高橋麟太郎博物館	アラサツバ (SP)	2005年	高橋家の個人コレクション	高橋麟太郎が収集したインディオ関係と考古学資料が中心。	約2500点。

15	プレジデンテ・ブルデンテ農村文化体育協会移民史料室	プレジデンテ・ブルデンテ (SP)	2007年	プレジデンテ・ブルデンテ農村文化体育協会	汎ソロカバナ地域の日系16団体を通じて史料収集を展開中。	物品と文書史料が約150点。
16	井口記念館	イタケーラ (SP)	1991年	社会福祉法人「こどものその」	知的障害児施設の開設に貢献した井口吉三郎の記念館	地域開拓史料、施設関連史料など約1000点。

SP…サンパウロ州 PR…パラナ州 PA…パラ州

呼びかけて2005年より3回にわたって史料館会議を開催してきた。会議の中では史料の受け入れ、保存方法など具体的な実技の研修会をもったほか、史料館同士が親睦を深め情報を交換しネットワークを作るとともに、移民100周年の写真集刊行と巡回写真展開催の協力などが討議された。

参考文献

- 文協50年史編纂委員会. 2007. 『ブラジル日本文化福祉協会創立50周年記念 文協50年史』文協50年史編纂委員会。
- ブラジル日本移民史料館運営委員会. 2008. 『ブラジル日本移民史料館ガイド』同史料館。